# 〈原著論文〉

# 外国人模擬患者参加型演習プログラムにおける看護学生の認識の変化

Participatory simulation-based program with the support of foreign patient simulators -Changes in the nursing students' perceptions-

#### 大堀美樹 山崎千寿子 本谷園子 飯田恭子 谷本真理子

- 1 東京医療保健大学 医療保健学部 看護学科
- 2 東京医療保健大学 大学院 医療保健学研究科

Miki OHORI<sup>1</sup>, Chizuko YAMAZAKI<sup>1</sup>, Sonoko MOTOTANI<sup>2</sup> Yasuko IIDA<sup>2</sup>. Mariko TANIMOTO<sup>1</sup>

- 1 Division of Nursing, Faculty of Healthcare, Tokyo Healthcare University
  - 2 Tokyo Healthcare University Postgraduate School
- **要 旨**:本研究の目的は、外国人模擬患者参加型演習プログラムに参加した看護学生の外国人患者との関わりに関する認識の変化を明らかにし、外国人患者対応力の向上に向けた教育プログラム開発の示唆を得ることである。演習に参加した3年次生21名を対象に、参加前後に自記式のアンケートを実施した。分析は「KH Corder」を用いて、頻出語と共起ネットワークを確認し、参加前後での認識の変化を確認した。外国人患者を受けもつことに対し、[日本人] と同様に [本人] が [望む] [治療] が [受けられる] ようにしたいが [大変] そうであるという思いが、経験を通して、[理解] できるよう [丁寧] に [説明]したいなどの思いへの変化が抽出された。外国人患者と関わる際の配慮は、看護師役割を意識した配慮から [相手] を [大切] に思う気持ちや [表情] に [気をつけ] 不安や緊張を [与え] ない配慮といった内容に変化した。経験を通し、外国人患者に関わる際に基盤となる態度や姿勢を学ぶことができた。

Abstract: The purpose of this study was to identify the changes in the nursing students' perceptions of nurse-patient interactions in situations involving foreign patients, in the hope to obtain valuable clues leading to the development of an effective educational program for enhancing students' capabilities and flexibilities in responding to foreign patient needs. The participating twenty-one 3rd-year university students were asked to complete the self-administered questionnaires both before and after the program. Using "KH Corder," most frequently used words or expressions were identified and co-occurrence analyses were done to clarify changes in the students' perceptions. The findings indicated that students' initial desire in taking care of foreign patients underwent changes through experience with the program. Initially, students felt it difficult, against their wishes, "for foreign patients to 'receive' 'treatments' they 'themselves' 'wished' just as the 'Japanese patients'"; while after experiencing the program, students began to show changes in their perceptions wishing to give "kind and thorough' 'explanations' so that foreign patients can understand." The initial role-conscious attitudes proper to nursing professionals underwent changes to more humane and considerate attitudes with the emphasis on "deep considerations for others", "not causing uneasiness or tension", or "careful of facial expressions." Through this simulation experience, students seemed to have learned the behavior and attitudes that form the basis for the interactions with foreign patients.

キーワード: 「外国人模擬患者」「看護英語」「学生の認識」「コミュニケーション」

Keywords: [Foreign Simulated Patent] [Nursing English] [Student Perception] [Communication]

## I. はじめに

日本における外国人生活者および外国人旅行者の増加<sup>1)</sup> により、外国人が日本で医療を受ける機会の増加にも繋がると言える。外国人患者にとっても安全かつ安心できる看護提供体制の充実が急務であり、中でも言語や文化の多様性に応じた看護実践や外国人患者への対応力が求められている。そこで2018年に本学医療保健学部看護学科の教員および他学科有志、近隣病院の看護師の協働により看護職の外国人患者対応力向上に取り組むプロジェクトチーム(グローバルナース育成開発プロジェクト;以下GNP)を発足した。

野中ら<sup>2)</sup>は、外国人患者に関わる看護師は、適切 な看護提供をしようとする意思や多様な文化背景を持 つ患者を理解したいという意思を備えながらも、過去 の負の看護経験や自らの語学力を自覚することで、患 者との関わりに自信が持てずためらうということを報 告している。2018年のGNPの活動でも、臨床看護師は、 外国人患者との言葉の壁により普段通りに振る舞えな いもどかしさ、一歩踏み込むことができずに諦めてし まう気持ち、周囲の人に聞かれることの恥ずかしさ、 話す内容を完璧に準備しないと失礼であると考えてい ることが示され<sup>3)</sup>、外国人患者に関わる看護師は、本 来の看護の力を十分に発揮しきれていないと言える。 近年、外国人患者への看護や異文化看護に関する課題 の報告が増えており、研修や教育の必要性が言われて いる4-5)。しかし、具体的な内容や方法は定まってお らず、外国人患者への看護教育は発展途上である。

2018年度のGNP活動を通して、外国人患者対応力

を高めるために日本人看護師に必要な教育課題として、異文化対応への関心を高める実践経験の積み重ね、自文化理解と異文化理解、医療ケアに関する言語力の強化の示唆を得た<sup>6)</sup>。そこで、2019年度は、異文化対応の関心を高める実践経験に焦点を当て、看護基礎教育課程の学生を対象に落合ら<sup>7)</sup> や宮津ら<sup>8)</sup> の教育プログラムを参考に、英語を用いて、看護師として外国人と直接対応する演習プログラムを計画した。

## Ⅱ. 研究目的

本研究の目的は、外国人模擬患者参加型演習プログラムに参加した看護学生の外国人患者との関わりに関する認識の変化を明らかにするとともに、外国人患者対応力の向上に向けた教育プログラム開発の示唆を得ることである。

## Ⅲ. 方法

- 1. 研究デザイン: 介入研究(介入前後比較デザイン)
- 2. データ収集期間:2020年1月
- 3. 研究対象者:本大学に所属する3年次生のうち、 本研究に同意の得られた学生21名。
- 4. プログラムの目的と内容(表1)

本プログラムは、外国人患者への対応に関心が高まることをねらいとし、看護の視点をもって外国人患者に対応する看護場面を想定した。3年次前期に日本人模擬患者を対象に実施した「胃がん摘出術後の患者の問診やフィジカルアセスメントの実施」の場面とし

表 1	プログラ	ラム構成
-----	------	------

日程	時間	構成	具体的内容	
1 日		・プログラムの説明 ・グループ決め ・場面イメージの共有 ・日本語シナリオの作成	・学生同士でのペア決めを行なった。 ・学生同士での意見交換を行い、イメージを共有した。 (日本で療養が必要な場合にはどのような思いを抱くのか、どのような看護を必要としているかなど) ・学生同士で声かけ内容や観察の順番などを考え、日本語のシナリオを作成した。	
	第2部 90分	・英語シナリオの確認 ・英語学習、発音練習	・教員が作成した英語の既存シナリオを配布し、英語教員によるレクチャーと発音の練習を行なった。 (英語シナリオは、学生が作成する日本語シナリオを想定しながら作成した)	
	第3部 90分	・演習に向けた練習	・教員がサポートに入り、学生同士で考えた声かけ内容を翻訳し、シナリオのアレンジを行なった。 ・学生同士で、発音練習やロールプレイ等、演習に向けた練習を行った。	
2 日	第4部 150分	・シミュレーション学習 →演習 デブリーフィング 全体デブリーフィング	・4グループ編成とし、各グループに外国人模擬患者1名、教員2名を配置した。 (教員の配置は、看護教員及び英語が堪能な教員で構成した。) ・シミュレーションは、学生2名がペアとなり、一連の場面の演習を15分間、デブリーフィングを10分間行った。 デブリーフィングでは、模擬患者を含めた各グループで、うまくいったところ、よかったところを振り返った。 ・上記の流れを3回行った後、全体デブリーフィングとして、模擬患者役からの感想、学生の感想を共有した。	

た。演習は、疼痛の有無、術後呼吸器合併症の有無、深部静脈血栓症の有無の確認を外国人模擬患者に対して英語でコミュニケーションをとりながら実施する内容とし、学生が気負わず外国人と接する体験ができるように、事前練習の時間確保、シナリオの作成、演習場面でのサポートを行う4部構成(表1)を2日間で実施した。外国人模擬患者1名に対して1つのグループを作成し、グループ毎に看護に関するサポートを行う看護教員・英語のサポートを行う教員を配置した。デブリーフィングは、デブリーフィングシートを用いた学生同士の振り返りに加え、外国人模擬患者からのフィードバックをもらう時間を設けた。参加した外国人模擬患者は、20代~50代で欧米やアジア圏の出身であり、日本での入院経験のない4名であった。

#### 5. データ収集方法

プログラム開始前と終了後に自記式質問紙を配布 し、研究者のいない教室で記載してもらい、封筒に封 入のうえ教室内に設置した回収箱に提出してもらっ た。質問紙には前後の比較ができるようにナンバリン グを行い、質問紙は無記名とした。

#### 6. データ収集内容

#### 1) 介入前調查

- ①対象者の基本属性:海外渡航経験、英語に触れる機会、参加理由(選択式)
- ②英語に対する興味関心と自信について (ある・どちらかといえばある・どちらかといえ ばない・ない の4段階)
- ③外国人患者を受けもつことに対するイメージや思い(自由記述)
- ④外国人患者と関わる際の配慮や工夫についての考 え(自由記述)

#### 2) 介入後調査

- ①英語に対する興味関心と自信について (ある・どちらかといえばある・どちらかといえ ばない・ない の4段階)
- ②外国人患者を受けもつことに対するイメージや思い(自由記述)
- ③外国人患者と関わる際の配慮や工夫についての考 え(自由記述)

## 7. データ分析方法

対象者の属性については単純集計を、英語に対する 興味関心・自信については記述統計を実施し、プログ ラム実施前後の英語に対する興味関心・自信の違いに ついて分析ソフト「JMP®prol4」を用いてWilcoxon 符号付順位検定を実施し、有意水準をp<0.05と設定し た。自由記述に関しては、テキストマイニングフリー ソフトウエア「KH Corder」を用いて分析した。KH Corderは樋口ら<sup>9)</sup> によってテキスト化されたデータ を計量的に分析し、データの全体像の把握や、デー タから抽出される特徴的な語や、語同士の関連性を 明らかにすることができるプログラムソフトウエア である。「外国人患者を受けもつことに対するイメー ジや思い」「外国人患者と関わる際の配慮や工夫につ いての考え」の項目について、プログラム参加前後で 認識に違いがあるかを確認するために、抽出語リスト を確認しながら、分析の意図にあった単語や専門用語 が適切に一つの語として抽出されるように、強制語と 除外する語を設定し、頻出語の確認と共起ネットワー ク分析を行った。KH Coderによる共起ネットワーク 分析では、計算結果として示された図に基づき、研究 者が原文の内容と照らしながら共起の関係性を解釈 し、意味構造やカテゴリーを抽出し意味づけることに より分析結果を得られる。①外部変数を参加時期(参 加前・参加後)に設定し、全体の共起ネットワーク分 析から参加前後での共起関係の違いを確認し、その 後、参加前と参加後それぞれの特徴を見出すため、② 参加前後に分けた共起ネットワークの分析を行なっ た。Jaccard係数は0.2以上とし、特徴を見出す上で、 適宜「原文」を確認しながら分析を進めた。①は語の 最小出現数を3、描写する共起関係を60本、②は、語 の最小出現数を2、描写する共起関係を60本に設定し た。また、「外国人患者と関わる際の配慮や工夫につ いての考え」については、共起ネットワークを描く際 [you,could,Did] の英語表現と、独立して描写された [思 う] [考える] を抑制語に設定した。分析には、共同研 究者複数名で検討し、妥当性や信頼性を保証した。

#### 8. 倫理的配慮

学生に対して研究の概要、目的、参加への任意性の保証、個人情報保護、不利益等への対応について口頭と文書で説明し同意を得た。なお、東京医療保健大学ヒトに関する研究倫理審査の承認を得て(教31-32C号) 実施した。

## Ⅳ. 結果

#### 1. 対象者の特性

海外渡航の経験がある学生は16名であった。日常の生活で英語に触れる機会がある学生が10名、英語で話す友人・家族がいる学生が4名であった。参加理由としては「今後、看護師として働く上で必要な学習だと思った」「外国人模擬患者に対する看護のシミュレーションを経験したかった」が最も多かった。

2. プログラム参加前後での英語への興味関心・自信

#### の変化

英語への興味関心については、参加前の平均は3.38、参加後の平均は3.67であり、Wilcoxonの符号付順位検定の結果、参加後の方が有意に高く変化していた(p=0.01)。同様に、英語に対する自信についても、参加前の平均は1.57、参加後の平均は1.77であり、参加後の方が有意に高く変化していた(p=0.04)。

- 3. プログラム参加前後での、外国人患者の関わりに 対する認識の変化
- 3.1 プログラム参加前後での頻出語の違い(表2)
- 1) 外国人患者を受けもつことに対するイメージや思い強制語に [外国人模擬患者] [外国人患者] [ノンバーバル] [バイタルサイン] [非言語] の5語を設定した。参加前の分析対象総抽出語数は275語であり、参加後の総抽出語数は275語であった。出現回数3回以上の単語を表2.1) に示した。[不安] [大変] の出現頻度はほぼ変化がなかったが、参加前に7回出現した [難しい]
- 表2 頻出語一覧

特に

#### 1) 受け持つことに対するイメージや思い

プログラム前		プログラム後	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
思う	11	思う	19
患者	10	受け持つ	10
難しい	7	英語	6
コミュニケーション	6	患者	6
看護	6	伝える	6
イメージ	5	コミュニケーション	5
違い	5	看護	4
英語	5	不安	4
言語	5	外国人患者	3
不安	5	感じる	3
外国人患者	4	関わる	3
自分	4	緊張	3
提供	4	言葉	3
伝える	4	自分	3
医療	3	説明	3
行う	3	大変	3
思い	3		
治療	3		
大変	3		

は、参加後には2回となり [違い] は、参加前は5回、 参加後は1回であった。[関わる] [緊張] は参加後のみ に出現した。

- 2) 外国人患者と関わる際の配慮や工夫についての考え
- 1)の強制語に加えて[価値観][恥ずかしがらず]を追加した。参加前の分析対象総抽出語数は285語であり、参加後の総抽出語数は276語であった。出現回数3回以上の単語について表2.2)に示した。参加前には[宗教][文化]が頻出していたが参加後には2回となっていた。[伝える]は、参加前は1回の出現であったが、参加後には頻出しており、[笑顔][ノンバーバル][緊張][表情]といった単語は、参加後にあらたに出現していた。

#### 3.2 共起ネットワーク分析での前後の比較

共起ネットワークでは、描写された線の長さや位置 には意味を持たず、線で結ばれていることで共起関係 が示される。共起関係の強さは描写線の太さで示され

#### 2) 外国人患者と関わる上での配慮や工夫

プログラム前		プログラム後		
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	
宗教	9	思う	11	
必要	8	伝える	8	
文化	8	コミュニケーション	7	
コミュニケーション	7	患者	6	
患者	7	ジェスチャー	5	
ジェスチャー	6	言葉	5	
思う	6	用いる	5	
配慮	6	外国人患者	4	
用いる	6	工夫	4	
考える	5	笑顔	4	
説明	5	相手	4	
理解	5	配慮	4	
違い	4	必要	4	
医療	4	ノンバーバル	3	
言語	4	英語	3	
工夫	4	緊張	3	
使う	4	大切	3	
イラスト	3	表情	3	
外国	3	理解	3	
看護	3			
言葉	3			
治療	3			
提供	3			
日本人	3			
表現	3			
分かる	3			

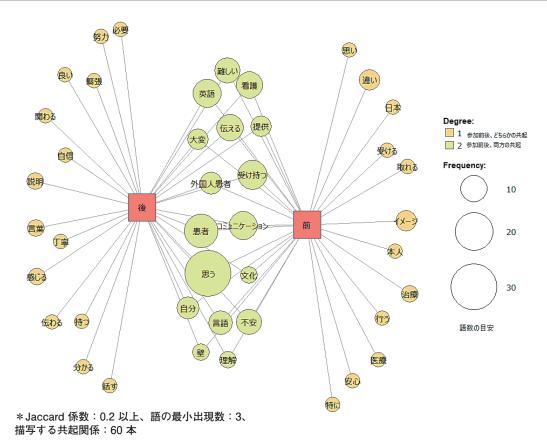


図1 プログラム前後の共起関係:外国人患者を受けもつことに対するイメージや思い

ており、二重線・三重線で特に強く点線で弱くなる。 円の大きさは語の出現数を表し、出現数の多い語ほど 大きく描写されている。それぞれの図の右側に円の大 きさと出現数の目安を示す。

1) 外国人患者を受けもつことに対するイメージや思いの変化

## 1). 1. プログラム前後の共起関係 (図1)

参加前後で共通していた語の繋がりは、[大変]、[英語] で「伝える」[難しさ]、[看護][提供] の [難しさ]、[言語]の [壁]、[理解] したい思いと[不安]であった。参加前のみに繋がりのあった語は、[日本] との [違い] に着目し、[安心] して[医療]や[治療]が受けられるようにしたい思いであり、参加後のみに繋がりのあった語は、[自信]はないが、[努力] したい思い、[伝わる] [わかる]ように [丁寧] にという思いが抽出された。

1). 2. プログラム参加前、プログラム参加後それぞれの共起関係

原文と照らし合わせながら関係性を確認した結果、【参加前】は5つの共起関係が示された(図2)。①[看護][提供][違い][言語][文化]が強く結びついており、看護を提供する上で言語や文化の違いについて[不安]があることが抽出された。②[外国人患者]に対して[治療][本人][望む][受ける][日本人][行う]が強く結びついており、外国人患者に対し、日本人と同様に本人

が望む治療が受けられるようにしたいが [大変] そうだという思い、そして、③ [安心] に [受け持つ] [医療] [取れる] [コミュニケーション] [壁] が結びついており、医療を安心して受けるために、受け持つ上でコミュニケーションの壁を感じていること、その他④ [患者]の [思い] を [汲み取れ] ない [思い]、⑤ [伝える] のが [難しい] 思いが抽出された。

一方、【参加後】は7つの共起関係が示された(図3)。 プログラム前と同様の① [外国人患者] の [受けもち] や [看護] は [大変] そう という共起関係があった。そして、② [経験] に対し [良い] [緊張] [知る] が強く結びつき、経験を通した学びから [必要] なことをイメージしていた。③ [関わる] と [不安] が結びつき、原文から、[関わる] ことで [不安] を理解したい思い、[関わる] [不安] が減ったことが抽出された。④ [多い] [理解] [丁寧] [説明] が結びつき、[理解] できるよう [丁寧] に [説明] したい思い、⑤ [努力] [伝わる] [分かった] 、⑥ [話す] [提供] [難しい] が結びつき、看護を [提供] したいが [話す] ことが [難しい] ということが抽出された。他にも⑦ [伝える] [感じる] が強く結びついていた。

2) 外国人患者と関わる際の配慮や工夫についての考えの変化

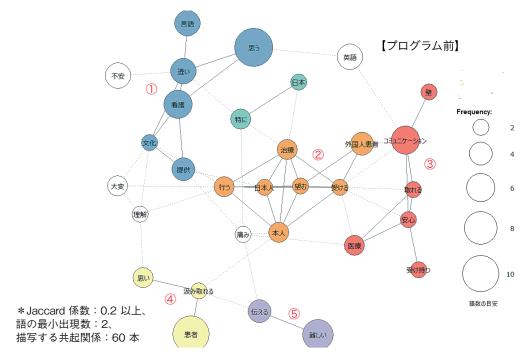


図2 【プログラム前】外国人患者を受けもつことに対するイメージや思い

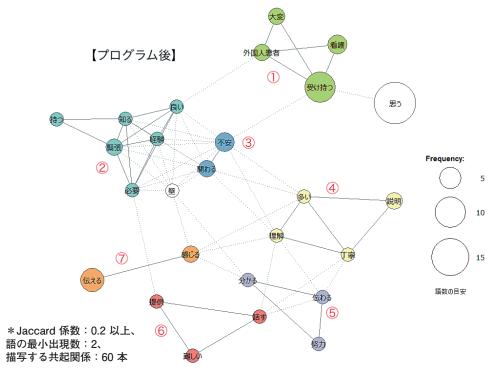


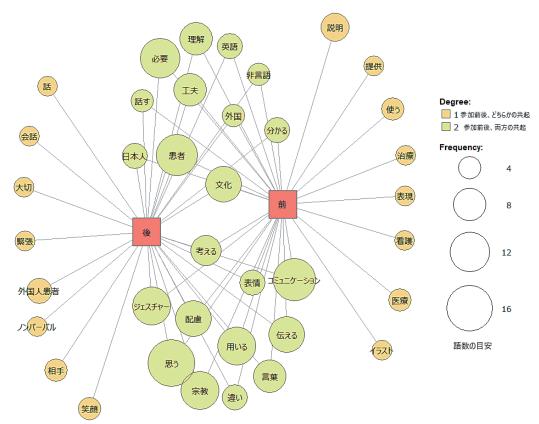
図3 【プログラム後】外国人患者を受けもつことに対するイメージや思い

## 2). 1. プログラム参加前後の共起関係 (図4)

参加前後で共通していた語の繋がりは、[文化] [宗教] の [違い] の [配慮]、[コミュニケーション] や [説明] では [表情] を意識し、[ジェスチャー] [非言語] を [用いて] [伝える] などであった。参加前のみにつながりのあった語は、[医療] [治療] [看護] [提供] と、[表現] [イラスト] [使う] であった。参加後のみにつながりのあっ

た語は、[相手] [大切] [ノンバーバル] [笑顔] [緊張] であった。原文では、[緊張] という言葉は、[緊張] せずにや [緊張] を与えないという意味で使用されていた。
2). 2プログラム参加前、プログラム参加後それぞれの共起関係

原文と照らし合わせながら関係性を確認した結果、 【参加前】は、大きく5つの共起関係が示された(**図5**)。



\* Jaccard 係数:0.2 以上、語の最小出現数:3、描写する共起関係:60 本

図4 プログラム前後の共起関係:外国人患者と関わる際の配慮や工夫についての考え

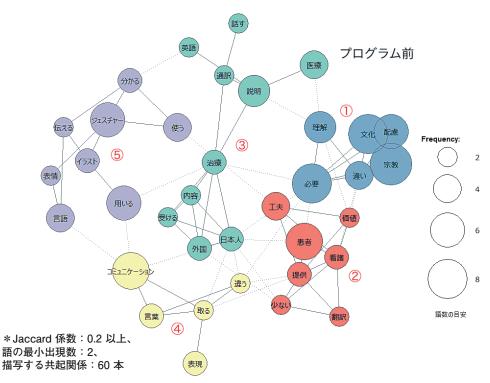


図5 【プログラム前】外国人患者と関わる際の配慮や工夫についての考え

① [文化] [宗教] に [配慮] し、[違い] を [理解] することが [必要]、② [患者] の [価値観] を理解し [看護] を [提供] する [工夫]、③ [医療] を [受ける] [外国] 人が [日

本人] と同様に [治療] [内容] を [通訳] で [説明] が受けられるような配慮、④ [言葉] や [違う] [表現] で [コミュニケーション] を [取る] 工夫、⑤ [イラスト] [ジェ

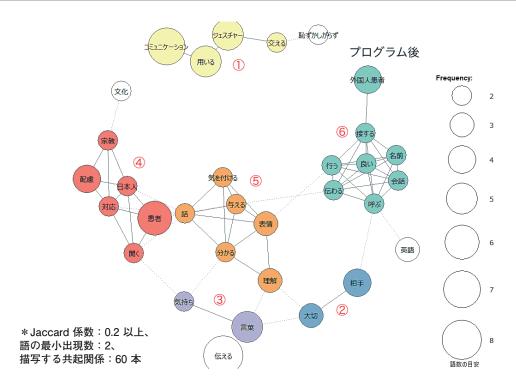


図6 【プログラム後】外国人患者と関わる際の配慮や工夫についての考え

<u>スチャー</u>] [表情] を [用いる] ことで [わかる] ように [伝える]工夫が抽出された。

【参加後】は、6つの共起関係が示された(図6)。 プログラム前にも抽出された① [ジェスチャー] を [用いた] [コミュニケーション] の工夫に、[恥ずかしがらず] が繋がりとして示され、② [相手] [大切] と③ [言葉] [気持ち] それぞれが強い共起関係にあり [相手] を [大切]に思うこと、[言葉] だけでなく [気持ち] への配慮が抽出された。また、④ [宗教] の [配慮] とともに、[患者] の (話)を [聞き]、[日本人] 患者への配慮と変わらぬ姿勢で[対応]する工夫、⑤自身の [表情] に [気をつけ] 不安や緊張を [与え] ない配慮と、[表情] を見て[理解] する工夫、そして、⑥ [外国人患者] に [接する]際には [会話] の中で [名前]を [呼ぶ] 工夫が抽出された。

### V.考察

#### 1. プログラム参加前後での学生の認識の変化

外国人患者を受けもつことに対するイメージや思いについて、参加前は① [日本] との [違い] に着目し、② [安心] して [医療] や [治療] が受けられるようにしたい思いに [不安] や [大変] が結びつき、③医療を安心して受けられるように受け持つ上でコミュニケーションの壁を感じていること、④ [患者] の [思い] を [汲み取れ] ない[思い]、⑤ [伝える] のが [難しい] というイメージが示されていた。これは、看護を学ぶ3年

次生なりの、看護師として外国人患者に適切に医療や 看護を提供したいという一方で、外国人患者の理解や コミュニケーション方法に過剰な壁をイメージし、不 安・大変・難しいというイメージが共起関係に示され ていたと考えられる。山下ら10)は、学生が看護学実 習中に直面している問題としてクライエントとの相互 行為に伴う問題をあげ、クライエントの状態を考慮し たコミュニケーションに難航し、言葉遣いに困惑して いることを示している。3年次生は領域別実習の履修 途中であり、これらの思いが読み取れる。一方、参加 後は②経験を通した学びから[必要]なことをイメージ し、④ [理解] できるよう [丁寧] に [説明] したい思い や、⑤ [努力] は [伝わる] ことが示されており、演習 やデブリーフィングを通して参加前にイメージしてい た不安や困難に対して自分がどのように対応するか具 体的なイメージが膨らんだと考えられる。さらに③ [関わる] と [不安] の結びつきには、[関わる] ことで対 象の[不安]を理解したい思い、[関わる][不安]が減っ <u>た</u>ことが示されており、参加前に抱いていた過剰な壁 や不安が演習経験により緩和されたと言える。

外国人患者と関わる際の配慮や工夫については、[医療] [治療] [看護] [提供] は参加前のみの繋がりであり、外国人患者が [医療] [治療] を受けられるようにという看護師としての役割を強く意識し、医療の提供や治療を円滑に行うため [伝える] ことに意識が向いていたことが言える。参加後は外国人模擬患者とのやりとり

の経験により、日本人との違いを意識していたこと、 ① [恥ずかし] がっていたこと、日本人患者への対応 と共通するものがあることに気がつき、②の [相手] を [大切] に思う、③ [言葉] だけでなく [気持ち]、⑤ の [表情] の理解、④の [日本人] 患者への配慮と変わ らぬ姿勢で [対応] するといった変化が見られ、関わ る上での自身の姿勢や態度を学習したと考えられる。 さらに、参加前には、伝えることを目的としたコミュ ニケーションツールが示されていたのに対し、参加後 には、[笑顔] [ノンバーバル] [緊張] [表情] といった単 語が出現し、⑥の [会話] の中で [名前] を [呼ぶ] が示 されていたことから、外国人患者に対する相互的なコ ミュニケーションの工夫を考えることにつながったと 考えられる。古場ら11)が行なった当事者参加型授業 では人間としての理解を深める学習効果があったこと を報告しており、今回の演習においても、同様の効果 が生じていたと考えられ、認識の変化につながったと 言える。

# 2. 外国人模擬患者参加型演習プログラムにおける 効果と課題

今回、プログラム参加学生の、参加前後での英語への興味・関心や自信の程度が有意に変化していた。井川ら<sup>12)</sup>の報告でも異文化に触れる機会のある学生の方が「対外国人緊張」が少ないことが示されているが、本プログラムでは外国人模擬患者への看護場面に触れる機会を通して、英語への興味・関心・自信につながる体験ができたと考えられ、外国人患者への関わりに対する壁を軽減できる可能性が示唆された。

外国人患者を受けもつことに対するイメージや思 い、外国人患者と関わる際の配慮や工夫について、参 加後に、相手を理解しようとする思いや、関わる上で の姿勢や態度、コミュニケーションに関する具体的な 工夫を考えられていた。これは、本プログラムで、看 護観が育まれつつある3年次生が、それぞれ看護師役 割をイメージしながら外国人模擬患者に対する演習に 臨み、外国人模擬患者とのやりとりの経験をしたこと で、相手を理解すること、姿勢や態度、コミュニケー ションの大切さに気がつくことに繋がったと考えられ る。これは、宮津ら130の演習で、学生は文化の違い を超えた看護の心にも気づきを得たという報告と同様 の結果であり、さらに本プログラムでは、言語だけに 頼らず、どのように相手を理解し、相手に伝えるかを 主体的かつ双方向のコミュニケーション方法について 具体的に考えるきっかけとなったと言える。これらの 演習を通した学びは、外国人患者に対応する際の基盤 となるものと考えられ、学生が外国人対応力を高める

ための教育プログラムの開発において、基礎として位置づけられると考える。

参加前に頻出していた [宗教] や [文化] への配慮が、参加後に減少していたことはシナリオの特性であったと考える。今回は手術後の観察場面であり、外国人患者に確認する内容が明確で普遍的であったこと、本プログラムの意図が外国人患者と英語を用いて看護実践を行う経験を通して関心を高めることに焦点を当てていたことによると考える。宗教や文化への配慮を含めて学習するためには、自文化および異文化の理解を促す内容を意図的に含めた看護実践場面での演習プログラムを検討する必要がある。シミュレーション教育においては、体験しながら学んだことを次の行動にいかすことができることが重要である<sup>14)</sup>とされており、今後継続的で段階的な学習の機会を作っていくことが必要である。

## VI.研究の限界と課題

今回の研究参加者は海外渡航の経験や日常で英語に触れる機会がある学生も多く、プログラム参加意欲やグループの相乗効果が高かったことが考えられる。また、3年次生の有志を対象に実施したため参加者が限られており、一時点での結果であるため、一般化には限界がある。今後は、参加対象者を広げるとともに、継続的にプログラムを開催し、縦断的に効果を検証していく必要がある。本プログラムでは、外国人患者に関わる際の基盤となる姿勢や態度を学習することが可能であることが示唆された。看護学生の外国人対応力を高める教育プログラム開発に向けて、今後は宗教や異文化に配慮した看護実践を意図したプログラムを検討することが必要である。

## Ⅶ. 結論

外国人模擬患者への看護場面を経験することを意図 した教育プログラム演習を行った結果、英語に対する 関心や自信が参加後に有意に高くなった。また、プロ グラム参加前は伝えることに重きがあった認識が、参 加後には相手を大切に思うこと、気持ちや宗教の配慮 とともに、患者の話を聞き、日本人患者への配慮と変 わらぬ姿勢で対応する工夫、表情に気をつけて不安や 緊張を与えない配慮をすることが必要という認識への 変化が示された。

## 謝辞

本プロジェクトの取り組みに協力いただいた学生と 教職員の皆様及び、外国人模擬患者役の皆様に感謝い たします。

本取り組みは、2019年度東京医療保健大学学長裁量 経費を受けて実施した。

## 参考文献

- 1) 国土交通省観光庁「訪日外国人旅行者数・出国日本人数の推移」(2019年1月21日)
   https://www.mlit.go.jp/kankocho/siryou/toukei/in\_
  - out.html?print=true&css= (2019.8.11)
- 2) 野中千春,樋口まち子. 在日外国人患者と看護師との関係構築プロセスに関する研究. Journal of International Health:2010:Vol.25:No.1:21-32
- 3) 谷本真理子,山崎千寿子,本谷園子,他. 日本人看護師の 外国人患者対応力向上に向けた実践的課題探究の取り 組み. 東京医療保健大学紀要: 2019;14(1);145-152
- 4) 久保陽子,高木幸子,野元由美,他. 日本の病院における 救急外来での外国人患者への看護の現状に関する調 査. 厚生の指標:2014;第61巻第1号;17-25
- 5) 中川恵子,多久和典子.地域における外国人医療の現在と今後への展望―医療機関を対象とした調査から

- 一.石川看護雑誌:2012;Vol.9;23-32
- 6) 3)
- 7) 落合亮太,松本裕,大河内彩子,他. 看護大学1年生を対象とした看護英語教育プログラムに関する実践報告. 横浜看護学雑誌:2017;10(1);29-35
- 8) 宮津多美子,藤倉ひとみ,GROW Deborah. シミュレーションで学ぶ異文化看護の実践 看護学生を対象とした外国人模擬患者演習報告. 順天堂大学医療保健学部 医療看護研究21:2018;142)1;9-18
- 9) 樋口耕一.社会調査のための計量テキスト分析.ナカニ シヤ出版: 2014
- 10) 山下暢子,舟島なをみ,中山登志子.看護学実習中の学生が直面する問題―学生の能動的学修の支援に向けて 一.護教育学研究: 2018; 27(1); 51-65
- 11) 古場真理,澤田孝子,大草知子.国際看護教育における 当事者参加授業の学習効果.日本医学看護学教育学会 誌:2017;26-2;46-51
- 12) 井川由貴,長坂香織.看護学部生の異文化受容に関する 現状と課題~A 県立大学看護学部のグローバル化推 進に向けた教育への一考察~. 山梨県立大学看護学 部・看護学研究科研究ジャーナル:2019;5;13-28
- 13) 8
- 14) 石橋曜子.臨床実践能力を養う看護教育システム を構築するためのシミュレーション教育.福岡大医 紀:2016;43(2);83-88